

デジタル戦略とは、 SNSマーケティングでも、アプリ制作でも、自動化でもない。 まちづくりの**優先順位**を、データで決定していくこと。

「三島は水の街だから、水辺を」。そう思い込む。だが事実を重ねれば、三嶋大社の門前町、うなぎと箱根西麓野菜の食のまち、東海道の宿場町が育てた飲み屋街、あるいは東京のベッドタウンかもしれない。すべてを一度に更新できる予算は、どの市にもない。だから、**まちの実像を見極め、順番を決める**。デジタルは、そのための土台だ。

1

課題を、並べる

賑わい × 防災 × インフラ × 公共施設
× 空き店舗

2

データを重ねて分析する

人口 × 高齢化 × 築年 × 災害 × 人流 ×
業種別経済

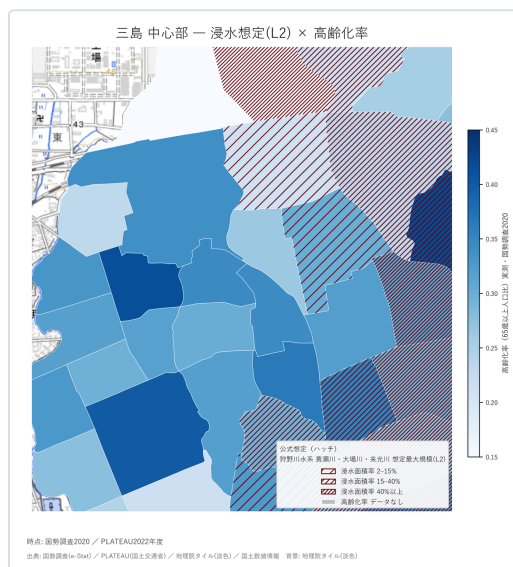
3

優先順位が視える

根拠を持って決める

にぎわいは、賑わいの話だけでは決まらない。観光客・移住・若者・イベントといった「人をどう呼ぶか」だけを見ても、順番は決まらない。**守り（防災・インフラ・公共サービス）と攻め（賑わい）**を同じ土台に重ね、何を・どれだけ・どの順番で整えるかを、データで決めていく。

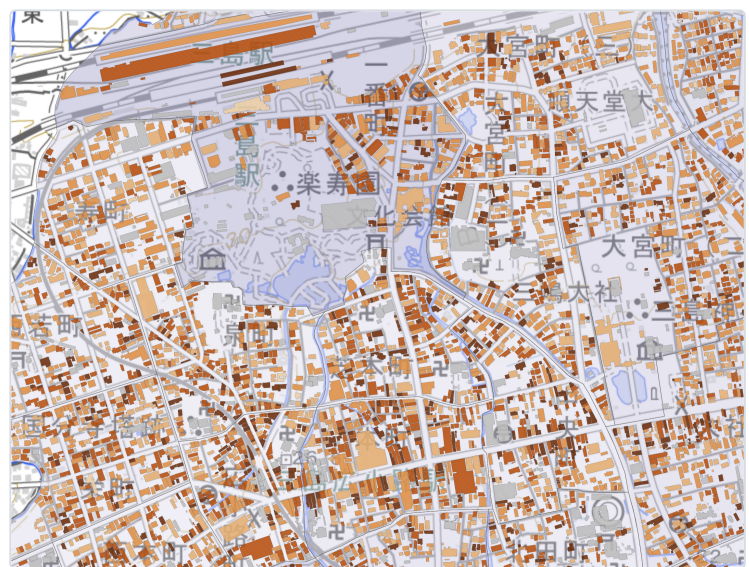
守り — 守るべき場所が浮かぶ



浸水想定（想定最大規模）× 高齢化率。低地（斜線）に高齢化の街区（濃い青）が重なる所が、「**誰から先に守るべきか**」を示す。避難計画もインフラ更新も、同じ地図で順位づけできる。

出典：国勢調査2020（総務省統計局）／PLATEAU（国土交通省）／Z-AIによる試作

攻め — 受け皿と伸びしろが見える



昼間人流 × 建物の築年（濃い茶＝1980年以前＝旧耐震）。人が集まるのに建物が古い場所——歴史的価値のある建造物も多い——は、**活かせば賑わいが伸びる**。そこが賑わいの伸びしろだ。

出典：人流オープンデータ（国土交通省）／PLATEAU（国土交通省）。推計を含む。／Z-AIによる試作

結論 — 思い込みで、まちの未来は決められない。要るのは、守りと攻めを同じ地図に重ね、優先順位を出し、変化に合わせて更新しつづける**分析基盤**だ。本紙の地図は、その試作である。

だが、そもそも。

市内データだけでは、三島の「未来」は予測できない。

市の外に出て、国内外の似た構造を持つ街のデータを重ね、先に行く街に三島を映して、**10年後・30年後を予測することだ。**

たとえば、二つの「そもそも」

そもそも ―――

人は、これからも「歩いて集まる」のか。

買い物のための徒歩は、モール化・オンライン化で世界的に減った。だが「歩く」には二つある。**生活のために歩く**まち（住む・働く・買い物が徒歩圏に揃う「15分都市」型）か、**歩きに来たくなるまち**（水辺や門前の風情そのものが目的になる回遊型）か。どちらを選ぶかで、まちづくりの優先順位も予算配分も変わる。

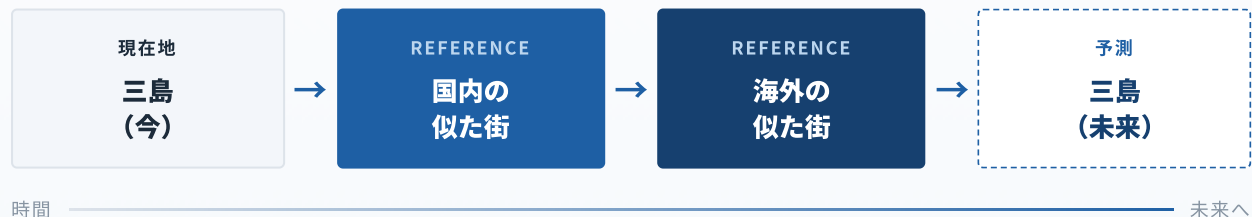
そもそも ―――

人口構成は、今のままか。

人口減少を移民で補う流れは、すでに各地で始まっている。国内でも海外でも、産業の担い手を移民に頼り、住民の構成が大きく変わった都市が生まれている。**構成が変われば、必要とされる言語・食・信仰・サービスが変わる。**三島もそうなるのか――備えが要るかどうかは、先行する街のデータが教えてくれる。

答えは憶測ではなく、**すでにこの変化を生きている街の――国内外の――データの中にある。**

先に行く街 = 三島の「予告編」



似た構造の街を選び（人口構成・産業・地形・交通）、先に行く国内・海外の街に、三島を時系列で重ねる。すると、その街の「今」が、三島の10年後・30年後を教えてくれる。未来を先取りして、決める。

結論――

まちは変化しつづける。その変化に追従できる分析の「**基盤**」づくり――守りと攻めを同じ地図に重ね、優先順位を出し、変化に合わせて更新し続ける仕組みづくりが重要である。

そして、それを担うデジタル戦略の専門家が必要である。

五十嵐こと AIプロダクトアーキテクト

公益財団法人 静岡県産業振興財団 登録専門家 / Z-AI株式会社

<https://z-ai.co.jp>